

現代日本語における接続助詞「し」の意味・用法 ——並列と理由の関係を中心に——

前田直子

1. はじめに

接続助詞「し」には、次の二つの用法があると言われている。

- (1) お金もあるし、時間もある。
- (2) お金もあるし、行ってみようよ。

従来、(1) のような「し」は、「並列」を表し、(2) は「理由」を表すと言われてきた。そして、「し」が表す「理由」の特徴として、「理由としてあげる材料が一つで他を言外に暗示している形のため婉曲になる」(国立国語研究所 1951: 58)、「理由づけを表すわけではなく、(中略)シの基本的な性格、機能が(それとなく)理由をいうのに向いていると考えるべきであろう」(寺村秀夫 1984、1993: 344)ということが指摘されている。

確かに「し」による理由表現は婉曲的であり、他にも理由があることが暗示されることは理解できる。だが、「並列」である「し」がなぜ、(2) のような「理由」を表すことが出来るのだろうか。事態を並べることがなぜ、理由を表すのか。このような問題意識に立ち、「し」の並列用法を見ていくことによって、「し」の並列用法と理由用法の関連について考察したい。

2. 先行研究

2.1 寺村秀夫 (1981, 1984)

従来、「し」については、「し」が表す「並列」という意味が注目されてきた。並列を表すのであれば、連用中止形やテ形でも十分であるからである。この点について、寺村 (1981: 33) は、「「…し」という言い方は、文として現れているかいないかは別として、ある一つの命題が意識にあり、それに該当するような動作・出来事を並べる点に特徴があるだろう」と述べ、具体的には、次のように説明している。

- (3) 彼はピアノも弾くし、作曲もするし、歌も上手だ。

この文は、「彼は音楽の才能がある」という命題 (寺村 (1984) では、統括命題と呼ばれる)

が背後にあつて、その例として、「ピアノを弾く」「作曲をする」「歌が上手だ」という3つの例を挙げたものであると記述した。この指摘は大変重要なものと思われる。一方、理由を表す用法については、次のように述べている（寺村 1984、1983: 344）。

(4) ちょっと用事がありますし、お先に帰らせてもらいます。（京都弁）

この文については「理由を表すわけではなく、「し」の基本的な性格・機能が、（それとなく）理由を言うのに向いている」との指摘にとどまっている。

2.2 森田良行（1984）『基礎日本語 3』

森田（1984: 176f）は、「し」の起源が形容詞型活用の語尾であるという点に触れたのち、「し」の用法を、次のように整理した。

1) 複数の事実・条件をあげて強調する。前件は両方とも成り立ちうる現実の事態。

① 食い違う事柄を並べる

(5) 時間は迫っているし、レポートははかどらないし、弱ったな。

② 共存する事柄を並べる

(6) 天気はいいし、日曜日だし、遊びにでも行くか。

2) 一つの事柄を取り立てて示し、そこから導かれる結果・判断を述べる。

(7) 公衆電話一つないし、とにかく不便なところだよ。

3) 控えめに、あるいは考え深げに言いさし、そこから導かれる結果・判断を言外に込める暗示的な表現。

(8) 大学へは行きたいけれど、親は反対するしなあ。

1) がいわゆる「並列」、2) が「理由」に相当するものと思われるが、両者は対等に併置されている。なお、ここでは、言いさし用法を取り上げている点も注目される。

2.3 張素芳（1994）

張（1984）は、並列とは前件と後件を入れ替えてもよいはずだという点から出発し、最終的に「し」の用法を、次の4つに分類している。

1) 並列関係

(9) 仕事もつまらないし、収入も少ない。

2) 単純接続

(10) めぐみは亭主と別れて、家に戻ってこなかったし、きょうハンガリからの留学生が来た。

3) 累加関係

(11) 倉田君は数学の公式も自然に覚えられるし、それをまた簡単に応用できる。

4) 因果関係

(12) もう遅いし、そろそろ帰ろう。

従来の「並列」を1) から3) の三種に細分化した点は興味深い、それらと4) の「理由」を表す用法との関わりは、明らかではない。

2.4 小林幸江 (1994)

小林 (1994) は、外国人の産出した「私はオーストラリア人だし、名前はジョーです。」という文の不適合性から、「し」の表す並列の特徴について考察している。ここでは、「し」の機能は「ある〈判断〉を導くためのある種の〈提示〉を示している」とされ、〈提示〉と〈判断〉の表れ方について、単文の場合だけでなく、連文の場合も取り上げた点が注目される。それぞれにおいて、「し」は〈提示〉を並べる場合(下の①と③)と、〈提示〉と〈判断〉が表れる場合(下の②と④)があると、さらに意味によって下位分類を行っている。

1) 文単位での「し」の用法

①付加

(13) この公園は広いし、きれいだ。

②理由

(14) この公園は広いし、きれいだし、いつも大勢の人でにぎわっている。

2) 文と文との関わりにおける「し」の用法

③並列的な関係

(15) この公園は都心に近い。中も広いし、きれいだ。

④「判断」と「提示」の関係

(16) この公園が人気があるのは当然だ。広いし、きれいだし、都心にも近い。

〈提示〉を並べる①と③が「並列」にあたり、〈提示〉と〈判断〉が現れる②および④が「理由」に相当する。両者が関連することは例文から伺えるものの、①と②、あるいは③と④の違いは〈判断〉の有無とされている。

2.5 グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』

グループ・ジャマシイによる『日本語文型辞典』(1998: 135f) では、明確に「し」が「並列」と「理由」の2つに分けられている。「並列」の「し」については、次のように書かれている。

(17) 節と節を「そして」の意味で繋ぐ表現。同時的なことがらや話し手の意識の中で互いに関連しているような事を並べる時に使う。ことがらを時間的な順序で並べあげていくときには使えない。

(誤) 先週大阪へ行ったし、友達にあった。

また、「理由」の「し」については次のようにある。

(18) 理由を表す。「ので」や「から」よりもゆるやかな因果関係で、他にも理由があるという含みがある。

このほか、共起する助詞や典型的な文型についても詳細に記述され、「～じゃあるまいし」といった固定的な形式も取り上げているが、辞典という性格上か、二つの「し」を結びつけようとはしていない。

2.6 堀池尚明 (1999)

堀池 (1999) は、理由をあらわす「し」から出発し、「し」と「から・ので」との違いを論じて、双方の違いが、主節末に出現するモダリティ表現や主体の人称にあることを指摘した。「理由」の用法から「並列」の用法について考察を進めている点、他の研究とは異なる方向性が注目される (後述)。

2.7 白川博之 (2001)

言いさしの「し」の解明という観点から「し」の談話機能を考察したものに白川博之 (2001) がある。白川 (2001) は、「し」の用法を「併存用法」(例 19) と「列挙用法」(例 20) に分けた。

(19) それは神秘主義ともあまり関係ないし、前世の問題とも関係ないし、霊界の問題とも直接、関係ないですね。

(20) 平凡だし、変わった趣味もないし、可愛げもないし、不良っぽくもないし、フフ、女性を引きつけるところ、少ないと思っています。

両者は寺村の「統括命題」の有無において異なるとしている。すなわち「列挙用法」は「統括命題」を常に伴うが、「併存用法」は伴わず、両者は区別して考えねばならないとされている。その上で、「接統助詞シの機能」を、「「Pシ」は文内容 P が成り立つだけでなく、それ以外にも成り立つような文内容 X が併存することを示す」と規定した。

2.8 先行研究の問題点

先行研究では、「し」に「並列」と「理由」があることを指摘しながら、その両者を、基本的には別物として扱っているようである。また、「並列」がなぜ理由になるのかという点にも踏み込まれていない。「し」が持つ、「並列」と「理由」という 2 用法を説明するためには、何よりも「し」の本務であると考えられる「並列」の機能の解明が第一に必要であろう。本論文は、「し」の「並列」の用法にまず注目し、「並列」の「し」が一体何を並列させているのか、という問題から出発することとする。

3. 「し」の意味・用法

3.1 「し」の表す「並列」とは

「し」は複数の対等な事態を並べる表現であるが、しかし対等な事態であっても、並べることができるとは限らない。

- (21) ?? 私はオーストラリア人だし、名前はジョーです。(小林 1994: 15)
- (22) ?? 父は会社員だし、親切です。(同上)
- (23) ?? 東京は日本の首都だし、パリはフランスの首都だ。
- (24) ?? おじいさんは山へ柴刈りに行ったし、おばあさんは川へ洗濯に行きました。
- (25) A 「週末は何をしたの？」

B?? 「土曜日に掃除や洗濯をしたし、日曜日は映画を見に行ったよ」

- (26) ?? エジソンは電球を発明したし、ベルは電話を発明した。

これらの例文は文脈がなければ不自然である。「し」の並列用法自体が何らかの条件を必要としており、またそれが文のレベルを超えたものであることが伺える。このことは、すでに先行研究において指摘されてきた。

例えば、小林 (1994: 17) は、「文の枠を超え、「し」が文と文との関わりに関与している」と述べており、『日本語文型辞典』(1998: 135) では、並列の「し」が並べるものについて、「話し手の意識の中で互いに関連しているような事」と述べられている。また、堀池 (1999: 82) には、次のような指摘がある。

- (27) この世の中にはありとあらゆるいろいろな事態が存在しており、それらはもともと一つ一つの独立した事態として存在しているのであるが、それらの事態をわざわざ並列にして並べるといふことは、それぞれの事態がお互いに共存関係にあるのだという話し手の意識や認識のもとで事態が並べられていることになるわけであるから、その話し手の意識や認識が一体どういうものであるのかがその並列関係から読みとれることになる。

白川 (2001: 833f) は、「接続助詞シの機能は、それによって「接続」された前後の文内容を関係づけるという構文的な機能というよりも、その節の文内容を、表現上の前後や有形無形を問わず、他の文内容と関係づける談話的な機能であると考えた方がよさそうである」と述べている。先に見た寺村の「統括命題」という考え方は、まさにこうした点を先駆的に指摘したものと評価できる。

だが、こうした「話し手の意識や認識」、あるいは「統括命題」というものが、具体的に何を指すのかは不明瞭である。さらに、それがどのように理由の「し」とつながっていくのかも明らかではない。この点について考えるために、並列の「し」が並べているものを観察

してみたいと思う。

3.2 並列の「し」が用いられる場合

並列の「し」は単に対等な事態を並べているのではない。例えば次のような例文がある。

- (28) 賢一郎も父と同じ言い方をするようになった。よく似ている……と母は思う。それだけ息子は成長したのだ。成長して、男らしいわがままを見せるようになって来た。母の言うことを聞かなくなった。しかしそんな態度をされることが、母はあまり嫌ではなかった。あの子はきっと父よりも傑くなるに違いない。頭は良いし、丈夫だし、スキイがうまくてテニスが巧くて、そのうえ友達と議論をしても誰にも負けならしい。魅力があって、人づきあいが上手で、礼儀正しくて、努力家だ。あの子が出世しない筈はないと、母は強く信じていた。(青春の蹉跎)

ここでは、賢一郎について、「頭は良い」「丈夫だ」「スキイがうまい」「テニスが巧い」「友達と議論をしても誰にも負けならしい」「魅力がある」「人づきあいが上手だ」「礼儀正しい」「努力家だ」という9つの事態が並列されている。最初の2つが「し」によってつながれ、あとは、テ形・連用中止形で並べるか、文を切ってつないでいる。この9つの事態は、単に賢一郎の性格を並べているだけではないだろう。これらは全て「あの子はきっと父よりも傑くなるに違いない」「あの子が出世しない筈はないと、母は強く信じていた」という前後の部分の理由あるいは根拠を示している。9つの事態のうち、最初の2つが「し」によって結ばれているのは、並列の「し」自体が、単に事態の並列を示すのではなく、すでに理由を表す機能を持っていることを最初のところで明示していると考えられる。「し」が使われたところから、理由・根拠の説明が始まるということを示しているのではないだろうか。

このように、「し」には、第一に、因果関係の「因」を並べる場合がある。

3.2.1 因果関係の「因」を並べる場合

「し」によって並べられる複数の事態が、何かの「因」となっている場合とは、次のような例である。以下の文では、ある事態（波線部）がまず示され、その理由が、「し」によって並列されている。

- (29) 夕方まで鮎太とカメラマンは春さんの家の茶の間で睡った。昨夜ろくに眠っていなかったし、それに幾つか乗り継ぎして、長時間汽車に揺られて来た疲れが出ていた。(あすなろ物語)
- (30) 華岡青洲はといえば、この瀕死の妹を近頃は滅多に見舞うことがなかった。助けようのない血瘤だと見放しているせいもあったし、痛々しく病み呆けた肉親を見ることは耐え難かったのかもしれない。(華岡青洲の妻)
- (31) 鳥口の磨ぎ方はむずかしかった。油砥石で根気よく時間をかけて素直に磨がねば

ならない。刃先が合うようにするどく磨き上げないと墨の乗り具合が悪くなるし、
そうかといって磨き過ぎると、製図用のクロスを切断してしまうことにもなりか
ねない。
(孤高の人)

- (32) 裏街の小さな居酒屋の、土間に置いたテーブルを囲んで、彼等はいつものように
安い酒を飲みながら、三時間以上も議論をした。そういう店が居心地のいい場所
であったし、そして彼等には（身分相応）でもあった。四人とも法律を勉強して
いる大学生で、理窟っぽい青年たちだった。だから彼等のはてしない議論はほと
んど抽象的で、観念的だった。社会がどうの、政治がどうの、そしてまた人生が
どうの、革命がどうの……。
(青春の蹉跌)

「し」によって並列される事態が理由節に埋め込まれ、結果の前に現れる場合もある。
「し」が「因」を並列していることが一層明らかであろう。

- (33) 家の方には赤ん坊が生まれてなにかとごたついているし、会社の方も新年早々い
そがしい仕事があるから、今度はやめにするよ。
(孤高の人)

「し」で並べられた事態が、先行（あるいは後行）文脈に表された態度や判断の根拠であ
る場合もある。

- (34) 実はその新しい課——つまり第三課が近いうちできて、その課長におれがなるこ
とになったのだ。これは内密なことだから、他人にいつては困る。それで実は君
に話があるのだ。加藤君第三課へ来ないか。来てくれたら、ぼくも助かるし、君
もよくなる。おそらく君は技師になれる」
(孤高の人)

- (35) 「では山へ行くのはやめていただけないかしら。お母さんはもうすぐ故郷へ帰るし、
あとは私と登志子とふたりっきりでしょう」
(孤高の人)

- (36) 園子はよく食べたし、よくしゃべった。宮村のおかげで、いかに今日一日ひい目
に会ったかという話をしながらも、少しも宮村を憎んでいる様子は見えなかった。
宮村は、平常でない園子を見た。疲労が園子を一時的な昂奮状態におとし入れて
いるのだと思った。そういうことは、山歩きをしているとよくあった。

(孤高の人)

また、次のような例では、「し」によって並べられた複数の事態が、先行文脈に表された
事態をより詳しく言い換えたり、具体的な例となったものとなったりしている (cf. 小林
1994)。

- (37) 宮村は市川と水野の服装についても、鋭い視線を配った。市川は、アイゼンの紐
の結び方について文句をいわれたし、水野は、ほころびかかったオーバーズボン
をその場でつくろうようにいわれた。加藤がルックザックから糸と針を出して、
その小さいほころびを縫ってやった。
(孤高の人)

- (38) これから先のことを内藤はどのように思っているのだろうか。考えてみると、今ま

で大戸の試合が終ってからのことを話し合ったことがなかった。私も訊ねはしなかったし、内藤も言い出さなかった。どちらも、大戸との試合が終れば、道は自動的に開けてくると思っていたのかもしれない。(一瞬の夏)

(39) そうして私は大学へ進んだわけであるが、それですべてが片附いたのではなかった。教師のこんな態度は、なお何事も語っていなかったし、後継者の心づもりについても、何一つつかめなかった。(金閣寺)

(40) 加藤がひどく無口になったことは確かだったが、別に態度が悪くなくてもいいし他人との交際をすべて断絶したのでもなかった。志田虎之助のところと、外山三郎のところへはちょいちょいでかけていったし、可愛い登山家の宮村健に誘われると、園子の居る喫茶店ベルボーに行くこともあった。しかし、交際の範囲はそれ以上は拡大されなかった。それ以外の人間との交際は避けた。(孤高の人)

(41) 仏教の日想観の思想が到来する遙か昔から、日を拝む信仰は、日本人の間で深く行われていた。宮廷には日祀部の聖職があったし、一般にも、春と秋との真中頃、「日祀り」をする風習があった。(モーツァルト)

(42) その夜、江藤は眠れなかった。眠れないのは彼の良心の苦悩であった。しかし良心とは、良心に過ぎない。良心は立身出世の役に立つものでもなかったし、生存競争の場に在って彼を有利にするものでもなかった。むしろ良心をどうやって閉じこめてしまうか。その事実の方が大事だった。良心とは要するに自己満足にすぎない。(青春の蹉跎)

このような言い換え、あるいは具体例の「並列」も、先行文脈に表された事態の「因」の「並列」というよりもむしろ、先行文脈に表された事態を話者の判断とし、その判断の「根拠」を表していると見る事が出来るだろう。(cf. 小林 1994)

以上、並列の「し」と見えるものも、単純に事態を並べているのではなく、すでにある事態の「因」を並べていることを見た。「因」には、事態の原因、判断の根拠があった。また、判断の根拠の周辺的な例として、具体例や具体的に言い換えた表現が表れることを見た。これらを図示すると、次のようになる。

図 1 「因」を並べる「し」

①話者の主張・判断が先に現れる場合

話者の主張・判断。理由・根拠 し 理由・根拠。

②話者の主張・判断が後に現れる場合

理由・根拠 し 理由・根拠。だから 話者の主張・判断。

③全体が1文として現れる場合

理由・根拠 し 理由・根拠 から 話者の主張・判断。

こうした点は断片的にはすでに先行研究で指摘されているが、さらに興味深いのは、「し」が並べるのは、「因」だけではなく、その逆の「果」である場合もあることである。

3.2.2 因果関係の「果」を並べる場合

「し」によって並べられた複数の事態が、結果を表す文となることもある。

- (43) 正直なところ、彼が興味をもっているのは大橋登美子ではなくて、登美子が女であるという、その事だけだった。彼女が女であることには、抵抗し得ないような誘惑を感じる。けれども大橋登美子という人格が、邪魔だった。[だから]彼は今まで一度も愛の告白や愛の誓いを与えなかったし、一通の手紙をも書かなかった。(青春の蹉跌)
- (44) 「うん、とってもよかった。ひとつの試合をやって千ドルももらったのかな、それだけあればひとつの家族が一年ちかく暮らせるんだって、あそこでは。[だから]、金に苦労はしなかったし、そこで洗礼も受けたし……でも、帰ってきて……あいつと別れることになったんだ」(一瞬の夏)
- (45) しかし、金川の気にしているのは、ほんとうは赤ん坊のことではなく、その赤ん坊に飲ませるミルクのことだった。金川の妻は乳が出なかった。[だから]、それだけ手数もかかるし、金もかかるのである。(孤高の人)
- (46) 竹神の部落は、冒頭にのべたように、日野川の奥の高所にあったから、芦原や武生よりも、雪はふかかった。雪かきをする人はなかった。道は雪にうまり、道も谷も見わかちがたいほど、山は荒れた。[だから]、郵便配達も来なかったし、電燈もない部落は、まったく孤立していた。(越前竹人形)

「因」の場合と同様、理由節と共起する複文の主節（すなわち「果」の部分）に埋め込まれる場合もある。

- (47) 土器類は、学問的には仏教美術と関係が薄いですが、商売の方では、所謂仏教美術屋が扱うもので、私も極く自然にそういう世界にも接触したが、何となく陰気な空気で深入りする気になれなかった。しかし、仲間には好きなのが沢山いたから、歴史は好きな方だし、好者の講釈は面白く聞いていた。(モーツァルト)
- (48) しかし門弟が更に数人殖えていたので、家の中の人数は前とは較べものにならない。門弟の多くは学費を納めているから急造りながら書生部屋を建増したし、彼らの食事と洗濯などをする女中も一人備って、華岡家もようやく医家の体裁を整えようとしていた。(華岡青州の妻)

「し」には事態の「果」を並列させることがあることを見た。このことを図示すると、次のようになる。

図2 「果」を並べる「し」

①話者の主張・判断が先に現れる場合

原因となる事実。だから 結果 し 結果。

②全体が1文として現れる場合

原因となる事実 から 結果 し 結果。

3.3 「因」と「果」の関係

並列の「し」は確かに事態を並べるのだが、事態を単に並べているのではなく、ある事態の「因」または「果」となる事態を並べている。

(49) 旅行には行けない。お金もないし、時間も無い。

(50) 全然勉強しない。だから成績も上がらないし、親にも叱られる。

「し」は大きく見れば、どうやら因果関係に関わる何かを並列させているとすることができる。

おそらく「し」が並べているのは、「因」あるいは「果」と明確に言えるようなものではなく、いわば、ある主張あるいは判断をなす際に、その主張や判断を補強する材料となる事態と言うべきであろう。それはある場合には、その主張や判断の理由・根拠であり、ある場合には、結果でもある。

このことは、次のように、「因」とも「果」とも解釈できる例があることから明らかである。

(51) 雪枝の声が絶えず耳許で聞いていたが、鮎太は起き上がれなかった。しかし、気絶はしていなかった。波の音も聞えたし、高い空に幾つかの星も見えた。

(あすなる物語)

(52) 喜助は、一人ぐらしであったから、食べものも、衣類も、ぜいたくする余裕はなかった。仕事着も破けたままのを着ていたし、ひどくなると、手なれぬ針をもって自分で縫いものをした。

(越前竹人形)

(51) の例では「気絶はしていなかった」理由が「(なぜなら) 波の音も聞えたし、高い空に幾つかの星も見えた」からであるとも解釈できるし、また、「気絶はしていなかった」結果として、「(だから) 波の音も聞えたし、高い空に幾つかの星も見えた」と解釈することも可能である。(52) も「ぜいたくする余裕はなかった」と判断する根拠が「(具体的には) 仕事着も破けたままのを着ていたし、ひどくなると手なれぬ針をもって自分で縫いものをした」からであるとも解釈できるし、「贅沢する余裕はなかった」から、「(だから) 仕事着も破けたままのを着ていたし、ひどくなると、手なれぬ針をもって自分で縫いものをした」と、結

果が並列されているとの解釈もできる。

「因」と「果」が本来は正反対のものでありながら、類似性を持つことは、次のような現象からも伺うことができる。

(53) 雨が降ったから、地面が濡れている。

(54) 地面が濡れているから、(きっと)雨が降ったのだ。

事態の論理的な関係を示しているのは前者である。一方、後者の「から」節は、主節の判断の根拠となる事態を表している。この(54)のように、結果を根拠に、原因(が原因であること)を主張することができる。論理的に見れば理由と結果の両方が、同じ「から」節に表れるのは、意味的に見ればこのような理由なのだろう。「し」に「因」と「果」の両方が現れるのも、これと同じ現象であると考えられるのではないだろうか。論理的な「因」だけでなく、論理的には「果」であるものも、主張・判断の根拠となり得、それが「し」によって並列され得るのである。

話者が「原因・根拠」または「結果」を複数並べてまで主張したい事態とは何だろうか。それは、既に指摘されているように、「話者の認識」であり「統括命題」と言えよう。「し」によって並べられるのは、話者の主張や判断を裏付け、補強する材料となる事態であって、それらは複数ある方がより強固なものになる。その機能を果たすために並列の「し」は用いられている。

4 並列の「し」から理由の「し」へ

並列の「し」が因果関係に関わる複数の事態を並べていること、すなわち「因」または「果」にあたる事態を複数並べているとすれば、「し」に「理由」の用法が生まれるのも簡単に理解出来る。すなわち、「し」の用法の中で「因」を並べる用法において、本来並べべき複数の「因」のうち一つのみを提示し、他の「因」を述べないまま、主節の結果節につながっていけば、それがいわゆる「理由」の「し」であると解釈されるわけである。その先の解釈、すなわち、そこには現れていない他の理由をも含意するために婉曲な理由と解釈されることは、既に先行研究の指摘の通りである。

「し」の統語的な機能は、事態を並列的に繋ぐことであるが、そこで繋がれる事態と事態が本来、意味的に無関連なものではなく、ある事態の「因」あるいは「果」にあたるものである。このうち、「因」を並べる表現が可能であるからこそ、「し」は理由の用法を持つようになったといえる。

「し」が「因」ないし「果」を繋ぐ機能を持てるのは、「し」が独立度の高い従属節を結ぶ接続助詞であることと関係があると思われる。すなわち、「し」は「だろう」や「のだ」といった判断のレベルを表すモダリティ要素に接続することができ(中俣尚己2005)、この点

で他の並列を表すと言われる表現、例えばテ形や連用形、「～も～ば」とは一線を画している。下の(55)とは異なり、(56)～(58)には「だろう」や「のだ」を入れることはできない。

(55) お金もある {だろう／のだ} し、時間もある {だろう／のだ}。

(56) お金もあって、時間もある。

(57) お金もあり、時間もある。

(58) お金もあれば、時間もある。

ある事態の理由や根拠となる事態は、それ自体が完結し、確定している必要がある。また、ことに、ある判断の根拠となる場合には、そこに判断のレベルのモダリティ形式が入ることが必要である。独立性の高い従属節を受け止める「し」は、それが可能であり、このことが「し」の理由用法の統語的な基盤であると考えられる。

また、「し」は独立性の高い従属節に続くため、そこで文が終わることもできる。そのことが言い差し用法を生む理由でもあるが、同時に、本来並列されるべき事態のうち、1つのみが示されて2つ目以下が述べられないまま結果につながることも可能にしている。すなわち、本来なら主節に当たるような2つ目以降の節を省略することを可能にしているのが、「し」節の独立性の高さなのである。

図3 「並列」の「し」から「理由」の「し」、および言いさしの「し」へ

①理由・根拠が並列されている場合

理由・根拠 し 理由・根拠 { 。だから
から } 話者の主張・判断。

②理由・根拠のうち、1つだけが現れる場合 (() で囲まれた部分が省略される。)

理由・根拠 し (理由・根拠 { 。だから
から }) 話者の主張・判断。

③いいさしの場合

話者の主張・判断。 理由・根拠 し。

独立性の高さが、主節に相当する2つ目の節がなくても文として完結することを可能にしている。それが、同じく「並列」を表せる「て」や「ば」などとの大きな違いである。

5 おわりに

「し」は、判断のレベルまでを含みうる独立性の高い従属節を並列させる統語的機能を持

つ。例えば次の (59) は、「あのレストラン」の持つ特徴「料理がおいしいこと」と「値段が安いこと」を並列している。

(59) あのレストランは、料理もおいしいし、値段も安い。

しかし、「し」が用いられるためには、文脈として、次の二つのどちらかが、必要である。

(60) a あのレストランに行こうよ。料理もおいしいし、値段も安い。

b あのレストランは、鹿児島県のアンテナショップなんだ。

だから、料理もおいしいし、値段も安い。

a は「因」の並列であり、b は「果」の並列である。

「因」の並列は、主張・判断の前に来ることもでき、また複文の形で表すこともできる。さらに「し」自体が(並列された)「因」であることから、(63) のように、そのまま主節につながることもできる。この場合、明示的な理由を表す「から節」がないことによって、婉曲的な理由を表すことになる。

(61) あのレストランは、料理もおいしいし、値段も安い。だから、一緒に行こうよ。

(62) あのレストランは、料理もおいしいし、値段も安いから、一緒に行こう。

(63) あのレストランは、料理もおいしいし、一緒に行こう。

そして、倒置を経て、言いさし用法が派生したと考えられる。

(64) あのレストラン、一緒に行こうよ。料理もおいしいし。

接続助詞「し」の用法は、文のレベルでは捕らえられない。(cf. 小林 1994、白川 2001)。意味的に類似した形式を複数持つことが多い複文の記述的な研究に対しては、今後、このようなテキストレベルでの研究が期待されると言えるだろう。

【参考文献】

- グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 言語学研究会 (1985) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (二) —その2・原因的なつきそい・あわせ文」『教育国語』82 むぎ書房
- 小林幸江 (1994) 「接続助詞「し」の文論的考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター 20』
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』秀英出版
- 白川博之 (2001) 「接続助詞「シ」の機能」中右実教授還暦記念論文集編集委員会編『意味と形のインターフェイス 下巻』くろしお出版
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈構造」『日本語学』Vol.6 5月号
- 張 素芳 (1994) 「接続助詞「し」の用法と意味」日本文芸研究会編『文芸研究』135
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』財務省印刷局
- 寺村秀夫 (1984) 「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』3巻8号 (『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』(1993年、くろしお出版)に再録)
- 中俣尚己 (2005) 「善人もいれば悪人もいる」のような並列文について—「し」を用いた並列との比較— 関西言語学会 第30回記念大会 発表要旨

堀池尚明 (1999) 「シ」を用いた原因・理由表現について『筑波日本語研究』第4号 筑波大学
文芸・言語研究科日本語学研究室
森田良行 (1984) 『基礎日本語3』角川書店

【用例出典】『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』

現代日本語における接続助詞「し」の意味・用法 ——並列と理由の関係を中心に——

前田直子

接続助詞「し」には「並列」と「理由」の2用法があると言われている。しかし、両者の関連、あるいは、「並列」することがなぜ「理由」を表すことになるのかについては、これまで明確に説明されてこなかった。本稿は、「並列」の「し」が用いられている文脈を分析することにより、「並列」の「し」は、単なる事態の並列ではなく、すでに並列の段階で、話者の主張・判断の理由や根拠を並べているものであることを示す。「し」にはこのように「因」を並べる場合があり、これが「理由」の「し」に連続していくと考えられる。また「し」は「因」を並列させるだけでなく、「果」を並列させる場合もある。「し」は「因」または「果」を並べて、話者の主張・判断を補強する機能を果たしている。こうした「し」の意味・用法を探るためには、テキストレベルでの分析が必要であり、これは他の複文・従属節の分析においても今後、期待されることである。

キーワード 【「し」 複文 並列 理由 因果関係】

Usage of Conjunctive Particle “*Shi*” in Modern Japanese

Naoko MAEDA

It is said that the conjunctive particle *shi* has two usage: “coexistence” and “reason.” However, it has not been explained clearly how “coexistence” expresses “reason.” This paper proves not only that the coexistence *shi* links two or more situations but also that the linked situations are the reasons or results for an opinion or judgment of a speaker. Therefore, it is concluded that *shi* reinforces an opinion or judgment of a speaker by carrying out two or more reasons or results. In order to explore the meaning and usage of *shi*, analysis of complex sentences and subordinate clauses at a textual level is required.

Keywords: conjunctive particle “*shi*”; complex sentence; reason; result; causal relationship